

## 四季の子ども②

### 虫捕り

川田 学

(大学教授)

「二〇三」

昨年の夏は、ただひたすら虫捕りをした。とりわけトンボが主役であった。年少組の息子が、開眼してしまったのである。よくあるように、二歳児のダンゴ虫に始まった。保育園に行き決った時期があり、仕方なく、朝の三十分を付き合うことにした。園の玄関周りの壁際を、ほじほじ、ほじほじ。捕まえては私の掌に乗せ、観察する。丸まってしまえば、自分でも持てる。動きだすと、放す。そんなことを繰り返して、やがて一息つき、自分から玄関に向かった。

そうした朝のひとつが経験のため込んだか。ダンゴ虫からクモ、ハチ、チョウ、と関心が広がっていった。長い冬が終わり、年少組になると、登園渋りは不思議となくなった。ゆつくりとした春の目覚めが、子らの周りにまた虫を運んできた。そうして、三歳の夏になった。

日本には二〇三種のトンボがいる、ということを教えてくれたのは『日本のトンボ』<sup>注</sup>という図鑑である。大変な労作であるが、専門研究者から幼児までが楽しめることが特筆に値する。何しろ写真が生き生きとしている。心から昆虫好きな人が、苦勞もいとわず、遊び心をもって作り上

川田 学（かわたまなぶ）

北海道大学准教授。専門は発達心理学。子どもの見方を楽らかにする発達研究を模索中。著書：『0123 発達と保育』（ミネルヴァ書房）ほか。

げたに違いない。だから幼い昆虫博士の美意識を捉えるわけである。果たして、安価ではないこの図鑑を、件の子は手に入れた。遠方の義父が、トンボ狂らしい孫息子に贈ったのだ。

子どもが何かに熱中するとき、しばしばきつかけがある。幼児の場合、それはある程度の期間、一つ所に没頭することで火が付く。昨夏、私はかつてないほど忙しかった。家族のもろもろの事情もあり、三歳の息子は道南（北海道の南の方面）で田舎暮らしをする私の父母のもとで二週間ほど過ごすことになった。その間、彼は祖父母とひたすら虫捕り三昧の日々を送ったのである。とはいえ、三昧とは子どもにとつてであり、二週間後に引き取った後、父からは「今度は三泊までに勘弁してくれ」と泣きのメールが届いた。

しかし、この経験は濃密だったようだ。息子はわずかな期間のうちに別人になっていた。虫捕り網を持つ構えと足運びは、狩猟採集民の子どものそれであった。保育園に戻った彼は、お盆前までヒーローだった級友の嫉妬しつとを買った。散歩先の公園で、熟練の手つきで赤トンボを素手捕りされては、並みの年少児は舌を巻く。

親の休暇は、ほぼ虫捕りに費やされることになった。九月の五連休も、毎日同じフィールドに通った。赤トンボだけでも五種類や十種類はいるのだ。ヤンマの類いは、赤トンボとはまったく異なる飛行の仕方をするということにも、いまさらながらに感心した。かの図鑑と首つ引きで学んだ。居間にはトンボの羽音が響き、部屋中を飛び回って、息子の練習の餌食になった。

同じ場所に通いつめると、むしろ変化がよく見える。北国の秋は短いが、十月まではヤンマもわずかに飛んでいた。十一月、ちらつき始めた雪が、トンボの季節の終わりを告げた。盛夏には赤や青や緑の眼で華やいだ池が、さも寂しげである。それを眺める三歳は、何を思っていたか。

## セミの一生

子どもの頃、虫捕りが好きだった。ある時期、特にセミが好きで、虫かごに入りきらず、とうとう数十匹のセミを部屋に解き放った。当時は二つ下の妹と同じ部屋だったから、妹は嫌だったろうと思う。夜中、セミたちがジージー、ミンミンとやる。兄に辛抱強い妹だった。

あの頃、夏になると、昆虫採集セットというのが近所の店屋でも売っていて、母方の伯母が買ってくれた。本物の針が付いた注射器が二本、それなりに切れるメス、虫の息の根を止める薬液、防腐液、標本のピン。そんな感じのセットである。小学四年生頃だったと思う。今、あんな危ない物は売っていないかもしれない。私は、昆虫の標本を作るために、日夜、虫を捕り、注射で殺して、防腐液を入れて、ピンで虫を発泡スチロールに留めるということをやっていた。

誰だったか、そんなにセミを捕ったらかわいそうだと言った。セミは一生のほとんどを暗い土の中で暮らして、やっと地上に出たら捕まえられてしまつて、気の毒だと。幼心に、心が揺れた。でも、よく考えてみると、暗い土の中が不幸というわけでもない。地上よりは湿度や温度が一定で、外敵にも遭いにくく、結構居心地がよいように思えた。暗い所からやつと明るい所に来たから、捕ったらかわいそうというのは、にわかには納得できない気もした。

少年ながら、「かわいそう」の理屈をいろいろ考えた。セミが地上に出てくるのは、つまりは生殖のためだ。長いセミの一生の中で、ほんの最後にやって来る決死の時期なのだ。子孫を残せるか外敵に食われるかの大ばくちを打っているのが、あのセミか。そう考えると、セミのけなげさを感じた。私は何となく昆虫採集セットを使うのをやめてしまった。

## M君

再びトンボに戻ろう。ある保育園に、M君という二歳児がいた。夏の終わりに伺うと、先生が頭を抱えていた。M君、もう一か月半も「不登園」だと。家は自営業をしていたが、どうも彼は日がな一日、近所の店で過ごしているらしい。クーラーの利いた店内で、品物を物色している小さな背中が目に浮かんだ。

きっかけはあった。M君は時々隣接する幼稚園に遊びに行っていた。夏休み前の午前、消毒槽にプラスチックの魚をたくさん浮かべていると、幼稚園児たちがプールに来了。先生は悪気なく、幼児たちが足を洗うために、「M君、ちよつとごめんね」と、魚をどけた。そこでM君は切れてしまった。それ以来、ぱったりと保育園に来なくなったのである。

悩む先生と私で考えたのは、季節のおたより作戦であった。○歳児に妹がいたので、その連絡帳に最近の園の様子を綴る。M君に向けて。先生はこう書いた。「おにわには、あかとんぼがたくさんやってきました」。翌日、当の本人が虫捕り網を握りしめてやって来た。開口一番、「とんぼ、どこ?」。嘘のような、本当の話。

子どもにとって虫捕りにどんな意味があるか、などと考えてしまうとつまらない。でも、虫はいつも子どものそばにいて、支えてくれる。大人と子どもを、記憶と共につないでくれる。

夏は、虫と子どもの季節である。